

## 「ツクシのヒムカ」の語源解

ツクシの意味

「筑紫」の語源については、昔から諸説行われてきた。仙覚は、「国の形勢がツク(みみずく)に似ているところから」とし、本居宣長は「ウツクシの義か」とし、近年では『古語大辞典』が「ツクシ(構築道)の転」としている。いずれもコトバだけをみた語呂合わせ的な解釈であり確かな根拠があるとはいえない。

これに対し、地名研究に基づく柳田國男の説は聞くべき点が多い。<sup>(6)</sup>

ミヲツクシ(濤標) 水路の目印として立てた杭

シメツクシ(注連標) 邑落の境(にある地名)

ツクシモリ(標森)

//

などの例から、ツクシはもと標木の義であったものが、転じて広く境のしるしを意味するに至ったものとしている。古くは標木を立てて境の目印にする風が盛んであったという。

九州のツクシだが、福岡県筑紫野市に大字筑紫という地名があり、その近くには延喜式内社の筑紫神社が鎮座する。筑紫地名はこの付近から起こったものだろう。ここは、博多湾岸の福岡平野と有明海に向かう筑後平野が境をなすところ、ちょうど分水嶺となっている辺りである。分水嶺が境をなすのはよくあることだから、ツクシが境の意味を持つとすると、九州のツクシも本来「境」を意味する語だったとみることができる。

「筑後国風土記」にも「ツクシ」の起源説話がある。筑後と筑前の国の国境に「命尽くしの神」という荒ぶる神がいた。筑紫の君、肥の君らがこの神を祭り鎮めたという話である。ここでもツクシの神が「国境にいた」と語られておりツクシと国境が結びついている。

ただ、なぜツクシという語が「境」の意になるかという点では柳田の説に疑問がないわけではない。柳田は、「ツ(衝)クシ(串) || 目印として立てた棒」とみて、これを標木と解している。しかし、「ツ(衝)クシ(串)」だとすると、単に突き立てた杭を表すだけで「境」という語義が含まれない。「ミヲ(水脈)ツ(助詞)クシ(串)」と、ツを格助詞として説明する論者もいるが、これだとツクシ森のような語は説明がつかない。私は、

ツク(付く、両者が付く・接する)・シ(ニシ・ヒガシなどのシと同じ、提示の意)

と解する。棒とは関係なく、そもそもツクシは境の意なのだと思う。

「湊標」だが、これは万葉集にも歌われている語で「航路の目印として立てた標識」と解されている。しかし、ミヲは水緒、ツクシは境だとすれば、山の稜線を表す語とも解され、むしろこれが本来の意味ではないかと思う。実際、ミヲは三尾、見尾などの地名に残っている語と思われるが、たいてい山間部にある。また、水尾坊木という語があるが、坊木(榊木もしくはハゲボウズの木)は立ち枯れの木らしい。水尾坊木は峠などにあり目印となっている枯れ木のようなものである。

分水嶺に降る雨はそこで分かれる。だから、「みをつくしても逢はむとぞおもふ」の歌のように、ミヲツクシが別離の象徴となるのであろう。水路の目印として立てた標識をミヲツクシと言うとされるが、それはむしろミヲシルベと言うべきものである。

さて、ツクシが立てた棒なのか境界の線なのか、そこはやや不明確としても、「国や村の境界」を表す意味を持つということは承認してよいだろう。

「筑紫」という小地名が、やがて北九州から九州全体を指す名となるわけだが、それは筑紫に九州全体を統治する政治機構が設けられたからである。一方、われわれは次のようなことも想像しなければならない。

博多湾岸の福岡平野の勢力、有明海側の筑後川流域の勢力、この二つはおそらく別々におこり、ある時点で統合された。その統合は、けっして平和的な統合ではなく武力的な統合であっただろう。どちらが勝ったのかといえば、おそらくは平野面積の大きい方、その平野で争乱を繰り返し戦争技術を磨いてきた方、つまり筑後川流域勢力の方であろう。

#### 天孫降臨神話の意義

天孫降臨神話は、二つの勢力が争い、天つ勢力が勝ってツクシに天下するという物語である。天孫降臨は、ニニギ命が天の石位を離れ、天の八重のたな雲を押し分け、厳の道分き、道分きて、天の浮橋から筑紫の日向の高千穂のクジフル岳に降り立つ。『古事記』では、これをいかにも荘厳なさまに描写している。しかし、大国主の国譲りから天孫降臨に至る物語は、なかなか血なまぐさい。

「葦原中国」を手に入れようとした天つ神は、天吾比神、天若日子を派遣するが失敗に終わる。ようやく建御雷神が成功するのだが、彼は出雲で大国主の眼前に剣を突き立てて国譲りを迫る。八重言代主神は服属を申し出た後、海に没する。建御名方神は信濃の諏訪まで逃げて「我を殺すことなかれ」と命ごいをする。

こういう話もある。大小の魚を集めて服属を誓わせたが、その時ナマコだけは返事をしなかった。それでナマコの口を裂いたのがナマコの口が裂けた初めだという。たんなる寓話のように見えるが、魚を服属地の族長たちに置き換えれば生々しい話になってくる。

「国譲り」といえば聞こえはいいが、天孫降臨神話とは要するに、国々の征討、征服の物語だと言っている。

天神は、筑紫の日向に天降りするのだが、出雲や諏訪まで戦闘の舞台となっている。これは、物語が最初から日本全体を舞台とする物語として構想されたというのではなく、筑紫、出雲、諏

訪など別々の征討伝承があり、それが重なったものと解される。重なったというのは、物語の内容の類似性のために、時期の前後や地域の相違が曖昧になり、ひとつの物語として統合されたという意味である。

ニニギ命は、ツクシのヒムカに天降りする。ヒムカは今まで地名とみられ、宮崎の日向に比定されてきた。しかし、ヒムカは「ヒ(日)ムカ(向)＝日に向かう方向」で、ヒムカシ(東)と同じ語である。古形といえるかもしれない。

ヒムカシ(東)のシは、ニシ(日が「逃ぐ」方向)、ヒガシのように方向を表す語の語尾につく。このシは、ムカシ(向くを元にした語)、ハシ(端を元にした語)、イズシ(出石、出ツを元にした語)などひろく用いられている。おそらく「くである」と提示する機能を持つ接尾辞であろう。

地名のヒムカ(日向)というのも、つまりは東ということであり、日向地方というのは、九州の東側の意である。ただ宮崎あたりの日向が問題になるのもう少し後のことで、今は北部九州に目を向けなければならぬ。

天孫降臨で言う「ツクシのヒムカ」とは、「国境の東」という意味に解される。国境を挟む両国の争いに決着がついてそこに天下った。そして、

底つ石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽高しりてましましき。

(地の下の石根に宮柱を太く立て、高天原に千木を高くそびえさせてお住まいになった)

という。実際にツクシの東にそのような宮があった。太宰府である。もともと、旧太宰府跡は、

現在の大字筑紫の北にあたる。しかし、国境地帯は東西の山に挟まれて通路をなしている狭い平野であり、その東側の山に太宰府はあるわけだから、「国境の東」と言っただけではあてはまるといってよい。また、

此地は、韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国ぞ。

と書いている。太宰府あたりから福岡平野東部を流れる御笠川の先に志賀島があって、笠沙の御前を志賀島とみれば、太宰府から志賀島を結ぶ延長線上に韓国があって、地形描写の点でもぴったり符合する。「笠」というのは頭などを覆い被すものだが、志賀島は博多湾に被さるような形の陸続きの島であるから、ここを「笠沙の御前」というのはうなずける表現である。御笠川というのも、笠沙の御前に向かって流れる川ということだろう。

「底つ石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽高しり」という文言は大きな宮殿を意味する常套句とされている。大国主は国譲りの条件として、「宮柱ふとしり、氷椽高しり」で作った住処に自分が祀られるならば自分は退くと言っている。「退く」は「死ぬ」ということだろう。

古代の日本人の服属のさせ方は、首長は葬るけれども配下の支配者層は取り込む。彼らの力を削ぐために労役を課す。その労役が、葬られた首長を弔うための大社の建設だったのである。出雲に出雲大社があり、諏訪に諏訪大社があるのはそういうことだろう。

さて、「韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通る」国が征服された。これは福岡平野の国、つまり奴国であり、滅ぼしたのは奴国と国境を接していた筑後川流域勢力によるものと考えられる。そ

して、それまで両者の国境だったあたりに、滅ぼされた側の首長を祀るための宮が設けられた。こうしてツクシの地が九州の統治機関の地となるわけである。

#### コノハナサクヤ姫の物語

神話に深入りすると想像論になってしまい歴史の議論とはいえなくなる。しかしこのついでに、もう少し続けてみることにしよう。

天下ったニギ命はコノハナサクヤ姫をめとるのだが、ここに一つの事件が生じた。一夜を共にしただけで、コノハナサクヤ姫が妊娠したというのである。ニギ命は、「これは、我が子に非じ。必ず国つ神の子ならむ」と疑う。

ニギ命は、国神の娘をめとったわけである。ニギ命はコノハナサクヤ姫の妊娠の早さに、これは国つ神が自らの血筋の延命を図って、コノハナサクヤ姫をあらかじめ妊娠させたうえで送り込んできたと疑ったわけである。

ここから、古事記の話は少し分かりにくくなる。

戸無き八尋殿を作り、その殿の内に入り、土を以て塗り塞ぎて、まさに生まれむとする時に、火を以てその殿につけて産みき。

「土を以て塗り塞ぎた殿」と言ってもどんなものかわからないが、出口が塗り塞がれているならつまり牢屋であろう。コノハナサクヤ姫は牢屋に入り、火を放って生まれた子供と共に死んだ。

物語の流れとしては、牢屋に入れられ焼き殺されたといえは分かりやすいが、コノハナサクヤ姫が自分から入ったことになっている。神話は少し国神の側に同情的である。

『記紀』の物語から戦国大名まで、氏族間で服属を不す行為というのは、「女を入れる」ということであった。ニギがコノハナサクヤ姫をめとるというのも、そうした行為であり、古代日本社会の例から言えば当然そのようなことがあっただろう。コノハナサクヤ姫の死によって、志賀島に金印を埋め、いつの日にか再起を図った奴国の王統が絶えたということだろうか。

#### 高千穂のクジフル岳

天下った場所だが、『古事記』および『書紀』の本文・一書によって少しづつ違つ。

〈古事記〉筑紫の日向の高千穂の久士布流多気

〈紀本文〉日向の襲の高千穂峰

〈紀第一〉筑紫の日向の高千穂の櫛触峰

〈紀第二〉日向の櫛日の高千穂峰

〈紀第六〉日向の襲の高千穂の添山峰

『記』のクシフルタケは、「クシ(奇)フル(古)タケ(岳) || 靈妙な古い岳」であり、実際の地名ではなく、天より地上に降り立つにふさわしいように考えられた名である。『紀』本文と第六の書にみられる「襲」は「背」であり、「背」は夫を指すことからわかるようにバックボーンの意味になる。

そそり立つものと言ってもよい。ソホリのホは、オシ(大)に対するオホシのように強調用法である。要するに、古めかしくてすごいという表現を作っているわけである。いろいろと修飾語を重ねてはいるが、靈妙で古びた高い岳という以上に特に意味があるわけではない。

#### 奴国の滅亡

倭人伝の記述は、卑弥呼が遣使した二二九年以降、台与が立つまでの一〇〇〜二〇〇年間程度の魏使の伝聞に基づくものだろうが、陳寿の書きぶりからは、その頃にはまだ、奴国は独立国としてあったものと考えられる。もともと倭国二十一国の最後に「奴国」があり、これが筑後川流域を遡上しながら並べた二十一国だとすると、奴国はすでに邪馬台国に含まれている可能性もある。陳寿の記述にしても、異なる時期の資料を各種参照して書いているようで、時代的な錯誤が含まれている可能性がある。

卑弥呼の遣使では、南方のクヌ国との戦闘が問題になっている。筑後川河口の南にヤマト地名が残るのは、山門郡のヤマト勢力の進出によるものだろう。南部勢力との戦争に一定のけりがつき、その後、奴国の征討に移ったものと考えるのが順当だろう。それがいつかは、須久岡本の王墓がなくなり集落が縮小する時期だろうが、具体的には考古学の成果を待つしかない。

おそらく、卑弥呼の遣使が呼び水となって倭国の状態が半島に知られ、半島からの移入が進んだのだろう。邪馬台国は朝鮮半島の影響を受けながらさらに勢力を拡大することになる。